

sIL-2Rの院内検査化について ～院内化 1年間の使用経験をふまえて～

東京女子医科大学病院 様

(東京都新宿区)

【診療科】

血液内科、神経精神科、小児科、小児外科、整形外科、形成外科、皮膚科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、放射線腫瘍科、画像診断・核医学科、麻酔科・ペインクリニック、歯科口腔外科、総合診療科、リハビリテーション科、病理診断科、化学療法・緩和ケア科、睡眠科、黄斑疾患総合ケアユニット、女性センター、循環器内科、心臓血管外科、循環器小児科、消化器内科、消化器・一般外科、消化器内視鏡科、脳神経内科、脳神経外科、腎臓内科、泌尿器科、血液浄化療法科、腎臓小児科、糖尿病・代謝内科、糖尿病眼科、高血圧・内分泌内科、乳腺・内分泌外科、産科・母子センター、新生児科、呼吸器内科、呼吸器外科、膠原病リウマチ内科、整形外科(リウマチ)、小児リウマチ科、ゲノム診療科、小児総合医療センター、救命救急センター、前立腺腫瘍センター、女性排尿障害センター、炎症性腸疾患センター

【病床数】

1,194床(一般:1,148床 精神:46床)



●はじめに

東京女子医科大学病院では、2019年 2月から、外注委託していた可溶性インターロイキン-2レセプター (sIL-2R) 検査を、「ルミパルス L2400 / 短時間測定法」を用いた院内検査に移行されました。

院内検査を開始して1年間を経た今、sIL-2R検査の状況と院内検査化の効果について、同院 **中央検査部 三浦ひとみ 技師長** にお話を伺いました。

sIL-2Rの院内検査化の経緯についてお聞かせください

東京女子医科大学病院では、「患者視点に立って、安全・安心な医療の実践と高度・先進な医療を提供する」という基本理念を掲げ、右記の「5S」の精神のもと、質の高い安全な医療を提供しています。

現在の当院の病床数は1,194床であり、総合外来センターでは1日平均約3,800人の外来診療が行われています。

当院では、臨床の有用性が高く院内で測定可能な検査項目は積極的に院内検査に取り入れる方針で臨床検査を実施しており、「血液のがん」の一種である悪性リンパ腫に対する検査頻度が高いsIL-2R検査も、院内検査化項目の候補の1項目になっていました。その様な状況の中で、当院中央検査部にて運用している検査機器にて測定可能なsIL-2R検査試薬が販売されましたので、2019年 2月からsIL-2Rの院内検査を開始しています。



sIL-2Rの出検状況についてお聞かせください

●sIL-2R検査数

当院におけるsIL-2Rの検査数は、2019年2月の院内検査開始時から2020年の2月末までの13ヵ月間で、合計4,807件（月平均370件）という状況でした。

●sIL-2R検査の男女比

sIL-2R検査実施検体の男女比は、男性が45%、女性が55%（図1）という状況でした。

悪性リンパ腫の罹患数の統計では、男女比率は男性53%、女性47%というデータがあります（図2）。sIL-2Rの依頼検体＝悪性リンパ腫患者検体という訳ではありませんので、これらの数字が一致しないことに疑問はありませんが、男女比の逆転という状況には興味深いものがあります。

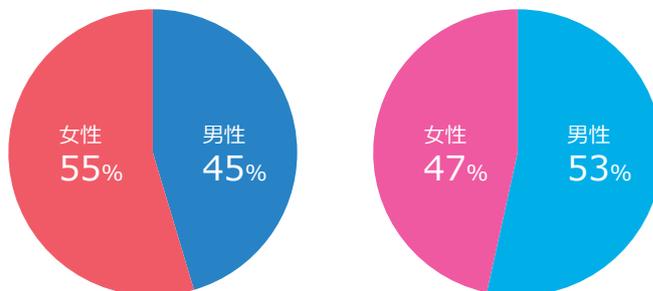
●sIL-2R検査の年齢構成

sIL-2R検査実施検体の年齢についても解析を行いました。検査年齢は下は4ヵ月の乳児から上は94歳のお年寄りまでと幅広い状況ですが、10歳毎の年齢構成では50歳代から急激に検査数が多くなり、70歳代が最も多く全体の3割以上を占める結果となっています（図3）。

悪性リンパ腫の年代別の罹患数に関しましても、その傾向は当院のsIL-2R検査実施検体の年齢構成と同様であり、50歳代から罹患数が急激に増加し70歳代が最も罹患数が多い状況になっています（図4）。

悪性リンパ腫の罹患数は男性の方が若干多く、年齢的には中高年が多い

図1：当院sIL-2R検査 男女比 図2：悪性リンパ腫罹患数 男女比



「国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」(全国がん登録)」より作成

図3：当院sIL-2R検査 年齢構成

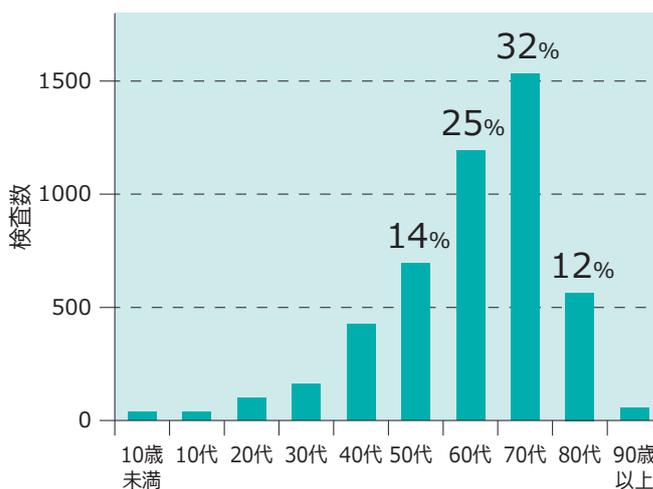
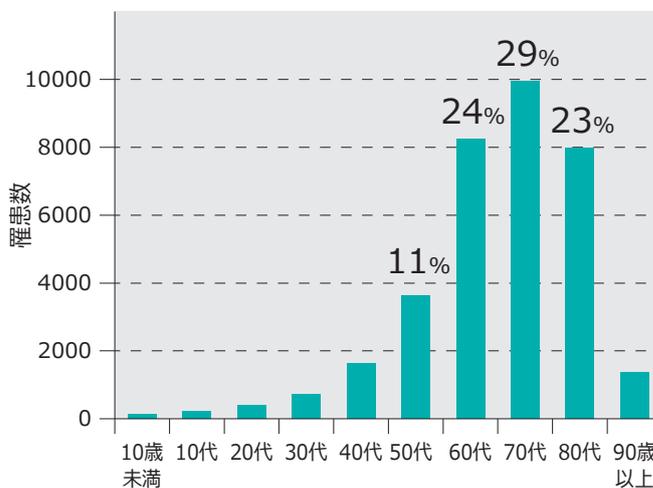


図4：悪性リンパ腫 年代別罹患数



「国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」(全国がん登録)」より作成

● sIL-2R検査の入院・外来比

sIL-2R検査実施検体の入院・外来の比率に関しては、外来患者の検体が圧倒的に多く、全体の8割以上という統計結果になりました（図5）。

この外来患者検体が圧倒的に多いという結果は、sIL-2R検査の主たる対象疾患である悪性リンパ腫の治療の進め方が大きく関係していると考えられます。

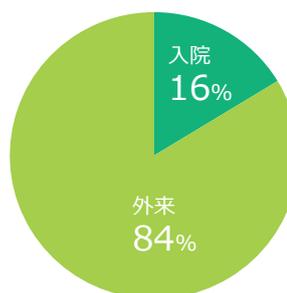
悪性リンパ腫の治療の進め方に関しては、当院の血液内科の臨床医に状況を確認しました。

まず、血液内科に入院される患者の中で最も患者数が多い疾患が悪性リンパ腫であるとのことでした。

そして、悪性リンパ腫の治療ですが、基本的には抗がん化学療法、または放射線療法、あるいはその両者を実施することです。抗がん化学療法は基本的に繰り返し治療を行い、入院期間は平均3週間程度で、治療法によっては入退院を繰り返しながら治療を実施しますが、多くの場合は、初回治療のみ入院で実施し、副作用など問題がなければ、2回目以降は通院にて治療を行うとのことでした。

近年では、悪性リンパ腫も含めがん治療に関しては、クオリティ・オブ・ライフ（Quality Of Life）という考えが重要視されていますので、通院での治療というのは患者側からみても重要な診療方針かもしれません。

図5：当院sIL-2R検査 入院・外来比



■ sIL-2R検査：外来患者からの検体が中心

■ 悪性リンパ腫：多くの場合は、初回治療のみ入院で実施し、副作用など問題がなければ、2回目以降は通院にて治療を行う

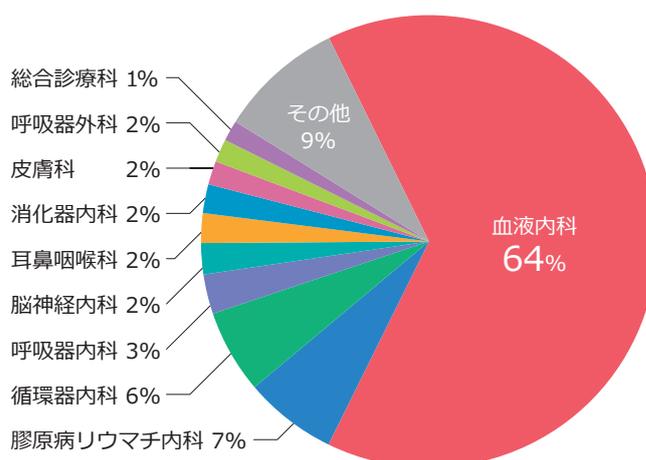
● 診療科別出検比率

当院におけるsIL-2R検査の出検は、37の診療科からと多岐にわたる状況でした。但し、出検の中心は、悪性リンパ腫の診療の中心となる血液内科であり、全体の検査数の6割以上を占める結果となりました。

この多くの診療科からsIL-2Rの検査依頼が出されている要因の一つには、悪性リンパ腫の症状の一つが関連しているようです。悪性リンパ腫はリンパ節に腫瘍ができるのが特徴ですが、肺、脳、鼻腔、咽頭、胃腸、肝臓、皮膚など、リンパ節以外のさまざまな部位に腫瘍が発生することもあります。各種臓器の腫瘍について、悪性リンパ腫が疑われる場合には、sIL-2R検査結果は臨床における一情報として用いられているようです。

また、膠原病リウマチ内科からの出検も多いですが、これはメトトレキサート使用中の患者に対するリンパ増殖性疾患の診断への使用が中心と考えられます。

図6：当院 sIL-2R検査 診療科別出検比率



■ 悪性リンパ腫による腫瘍は、リンパ節のみならず、リンパ節外の各種臓器にもできる。患者の各種臓器に腫瘍がみられる場合、悪性リンパ腫を否定する為の一つの情報として、sIL-2R検査結果が用いられている

■ リウマチ診療領域に関しては、メトトレキサート使用中の患者に対するリンパ増殖性疾患の診断の目的などでsIL-2Rの検査結果が用いられている

sIL-2R院内検査化のメリットについてお聞かせください

当院の中央検査部は総合外来センターに位置しており、外来診療での診察前検査として迅速に結果を返す事で診療部門の診断・治療をサポートする役割を担っています。また、全ての外来での測定項目は至急扱いになっています。

当院では項目に係わらず検査室に入った検体は全て1時間以内に検査結果を報告するという基本姿勢で検体検査に取り組んでおり、sIL-2R検査を外注委託からルミパルスL2400の短時間測定機能を用いた院内検査化へ移行したことは、迅速な検査結果報告の観点から、臨床から非常に高い評価を得ています。



総合外来センター 総合案内

sIL-2Rの院内検査化から1年が過ぎ、改めて臨床にsIL-2Rの院内検査化についてその効果を聞いたところ、「検査結果をタイムリーに確認することにより適切に診療をおこなえる/医療の質の向上につながる」という評価が多く得られました。

先のデータで示したとおり、sIL-2R検査は外来が中心です。

そして、初診の外来患者、再診の外来患者へのsIL-2R院内迅速検査の活用法としては次のケースが想定されます。



総合外来センター 採血室

■ 初診の外来患者（一次医療機関からの紹介で、各種臨床所見から悪性リンパ腫が疑われるケースなど）

1. 医師の診察を受け、診察時にオーダーされた検査（sIL-2R）を受ける
2. **検査結果（sIL-2R）を踏まえて、当日に再度、医師の診察を受ける**

■ 再診の外来患者（悪性リンパ腫の通院治療患者など）

1. 診察時に、次回の再診日の検査（sIL-2R）が予約される
2. 再診の際には、診察前に検査を行い、**検査結果（sIL-2R）を踏まえて医師の診察を受ける**

ここで重要なのは、報告した検査結果がその日の診療に活かされるということであり、迅速な検査結果の報告が医療の質の向上につながり、更には患者の利益にも結び付くことは、検査業務を担う者として高い喜びを感じます。

sIL-2R検査の院内検査化・診察前検査は、臨床のみならず患者の利益にも結び付く